

第一話 徹底的に彼の言いなりになってみる

愛菜と相談して数日、彼とはラインでやりとりが続いていた。もちろん彼は、私の想いを知ってか知らずか、ラブラブな文章を普通に送り付けて来る。もちろん私も、それに対しつつけんどんにせずラブラブな文章で返信していた。

彼は、どう思ってるのかな？

もしかしたら彼は遊びだと思ってるのかもしれないし、本当に好きでいてくれるのかもしれない。だけどそれは今のところどうでも良くて、とにかく私は彼の事をじっくりと観察する事になっていた。

そして今日も、自分の部屋で紅茶を飲みながら彼からのメッセージを開く

―― 会いたいな ――

既読を付けながらも、すぐに返信はしなかった。すぐに返信するのは癪だから、少しだけ待つ。五分。いや、十分。だけど、スマホを握りしめたまま、返信するタイミングを伺う自分が滑稽に思えてくる。

―― 本当に、会いたいのか？ ――

―― 本当だよ ――

彼はすぐに返信をくれた。本当にマメで、私を離したくないという気持ちだけはあのような気がする。私が返さないでいると、追メッセージが来た。

――週末は空いてる？――

また、直ぐには返さない。スマホを握りしめたまま、彼の言葉を見てただじっと考えている。本当ならすぐにでも空いてると言いたいところだけど、ワザとすぐに返さずにいた。そして私は面倒臭い女になってしまう。

――私の事、好きなの？――

――あたりまえじゃないか――

その答えは私の心を縛る、甘美な鎖だった。そして私の次の返事はすぐだった。

――うれしい。会いたい――

彼と約束をして、ラインを終える。

私は何をしているんだろう？ そんな葛藤はある。だけど愛菜と相談して本気であたってみる事にしたんだから、その事は考えないように頭から消し去った。

私は……たまに来る二人の週末を繋ぐだけの、彼にとっては都合のいい女だ。でも私には私の日常も人生もある。

「ふう……」

スマホをベッドに置いたり、また拾ったりして何度も見返す自分。そんな夜は、殊更長かった。

そして不毛な平日を終え、ようやく彼と会える金曜日がやって来た。普段よりもおしゃれをして出勤し、仕事が終われば軽く化粧直しをして髪を整え、軽く香水をふった。

トイレの鏡に映る自分。多分、地味ではあるが綺麗な部類だとは思う。もちろん彼以外に、言い寄って来る男がいない訳でもない。だけど今は完全に彼しか見えておらず、特に今日の私は彼以外の言葉は耳に入らないだろう。

会社を出て電車を乗り継ぎ、彼との街合わせの場所へと向かう。電車に乗りながらもまた、いらない事を考えてしまう自分がいた。

奥さんには、どんな言い訳をして来たんだろう？ 私とは、どれだけ一緒にいてくれるのかな？

それすらも分からない不確定な関係。だけど今日は、彼以外の誰の指図も受け付けない、彼が望むことを全部してあげようと思う。

駅の雑踏の改札の前で待っていると、彼が手を挙げて近づいて来た。

「お待たせ。ごめんね」

「良いんです。会社の近くじゃ、誰かに見られるかもしれませんがもんね」

「まあ……そうだね」

歯切れが悪い。大手を振って会える関係じゃないから、こうやってこそそと会わなければならない。それを分かって嫌味を言う私。

彼が先を行って私が後ろをついて行く。普通の彼氏と彼女なら手を繋いだり、並んで歩くような気がする。こんな些細なことまで気になり、私の考えを支配し鬱々とさせてしまうのだった。

「レストランを予約しているから」

「うれしい」

私の為に時間と頭を使って、レストランを予約する行動をしてくれた事が素直に嬉しかった。そこは洋風のレストランで、店に入っすぐ奥の個室に通される。

個室か。

もちろん二人の時間を楽しむのなら個室はベストだろうけど、他の人に見られたくないから個室にしたの？　とも思えてしまう。

「寒かったね」

「寒かった」

コートを脱いでハンガーにかけ、私達はテーブルにつく。

「なに飲む？」

「ワインがあるのね」

「じゃあワインにしよう」

コース料理らしく、それに合わせて赤ワインにした。しばらくすると店員がワインを持って来て栓を抜き、二人のグラスに注いで出て行く。

「乾杯」

「乾杯」

グラスを合わせてワインを口に含む。

何についての乾杯なの？ それすらも気になってしまう。でも優しく微笑みかける彼の笑顔が、私の固まりかけた心を溶かしていく。

次々にコース料理が運ばれてきて、私達はそれに舌鼓を打ちながら他愛もないカップルの会話をした。

「ねえ、いつまで一緒にいれるの？」

私は、ワザと上目遣いに狡猾に聞いた。

「明日は一日、一緒に居よう」

「ほんと？ うれしい」

「実は今日は、ホテルを予約してるんだ」

「そっか。わかった」

それだけで嬉しい。それなのに私はそれ以上を求めている。自分でも、なんでこんなに食欲になっているのかよくわからない。

ご飯を食べ終わり、ほろ酔いのままレストランを出てホテルに向かった。ホテルのフロントで鍵を受け取り、二人は二十二階の部屋へと向かう。部屋は結構広くて、窓の外にはスカイツリーが光っているのが見える。

「スカイツリーだわ」

「いい景色だ」

そう言いながら彼は、窓際に立つ私を後ろから包み込むようにハグした。二人でスカイツリーを眺めながら、彼が私に囁く。

「こうして一緒にいてくれるだけで、うれしいよ」

「うん」

「ごめんな。俺の勝手で」

そこで、いいのよ。とは言わなかった。確かに彼にしてみれば都合がいいし、それになんて答えたらいいかもわからない。

「今日は、好きにして」

「えっ？」

「あなたのしたいように、これからの私はあなたに従うわ」

「……そう……か」

彼は少し考え込むように返事をする。だけどすぐに私を振り向かせ唇を重ねて来た。

ちゅっ♡

優しいキス。でも私だけのものじゃない、誰かの為の唇。だけどその上手なキスは、一瞬にして私を解かせる力がある。

彼の舌がゆっくりと私の中に入って来たので、私はその舌を絡めとり、ねっとりとしたデイープキスをした。彼は私を抱く力を強め、私はただ彼のしたいままに身をゆだねる。

「いつもと違う匂いがする」

「新しい香水よ」

「そうか」

私はイヴサンローランのモンパリをつけていた。もうなりふり構っていられずに、香りから彼のハートを掴もうと香水を変えた。それに気が付いたらしく、彼は私の首筋に顔をつけてスースーと匂いを嗅いでいる。

「嫌い？」

「いや。いい香りだよ」

そう言いながら、首筋に唇を落としてスルスルと這わせる。

「ん……」

ぞくつとする。

そのまま彼が私の手を引いて、ダブルベッドに座らせた。またディープキスを交わし、首筋に唇を這わせて来る。私の視界には夜の窓が見え、私に覆いかぶさる彼の背中が見えていた。

そして私が言う。

「ねえ……」

「どうした？」

「うんと気持ち良くして」

「どうした？　いつもはそんな事言わないのに」

「いつも、遠慮してるでしょ？　だからあなたのやりたい事をやっていいわ」

それを聞いた彼は優しく笑い、そして私の耳元に口を近づけた。

「本当にいいのか？」

「うん」

すると彼は、ベッド脇の床に座って私を見上げて来た。私は彼を見下ろし、何をしてくるのかを待っている。次の瞬間、彼は私の太ももに頭を乗せた。目をつぶって、うっとりしているようだ。

私は子供を撫でるかのように、彼の頭を優しくなでる。そして声をかけた。

「お仕事疲れたの？」

「疲れた。もうストレスがパンパンだった」

「大変ね、だったらそのストレスを全部、私に吐き出して」

そう言うと、彼が私を見上げて来る。

「好きだ」

彼は愛情の鎖で私を縛って来た。私は、これ以上ない優しい笑みを浮かべて返す。



「私も好き。好きな人がストレスでいっぱいなんて嫌だわ」

「うれしいな」

そう言つて彼は、私の太ももの間に顔をうずめた。息で太ももが暖かい。彼の手が私の太ももの外側に触れ、それがスルスルとスカートの中に潜り込んで来る。今日はデートなので、ライトグレーのフレアスカートをはいていた。上はリボンタイのついた合織のブラウス。ちよつとお嬢様系の格好をしているが、これは彼の好みのスタイルだった。

パンストの上から優しくまさぐる彼の手。そして彼は顔を上げて、私の瞳をじっと見つめて来る。

私はそんな彼に聞いてみた。

「私より派手で綺麗な人がいるのに、どうして地味な私を選んだの？」

「理由なんてない。ただ好きだなんて思ったからだよ」

そうなのだろうか？ 派手な子は騒ぎそうだけど、私は落ち着いているから騒がないと思ったんじゃないの？ そんな疑念が頭をもたげる。

「そうなんだ……」

「着飾らなくても綺麗な君は、凄く貴重だと思う」

「そうかな？」

「そうだ。凄く価値がある女だと思うよ」

本当にそんな風に思ってるのだろうか？　それが彼の本心なのかどうかは良く分からないけど、その目の奥まで探る術は私には無かった。ただ、そのいやらしい手つきが、するするとスカートの中をまさぐるのを感じているだけ。

さわっ。

彼の手が私の股間に伸びた。パンストの上からほんのちよつとだけ指があたり、私はピクリと動いてしまう。

ずっとこの時間を待ってた。毎日会えるわけじゃないけど、なんとなくランチで待ち合わせをしてご飯を食べたりもした。でも親密な会話をする訳じゃなく、ただ同じ会社の人間として談笑をして過ごすだけ。そんな彼とようやく、二人きりの部屋で二人きりの時間を過ごす。

ここに都会の喧騒は届かず、窓から見える夜景はキラキラと光って二人の空間を彩る。

しゅるっ。

彼の指が、強く確かに股間をなぞる。

ぴくっ。

「本当に敏感だな」

「あまり……慣れてないの」

「前の彼氏と別れてずいぶん経つんだっけ？　しかも学生の時の」

「そう」

彼と私は少し歳の差がある。私が二十四歳なのに対して、彼は三十歳。六歳差だけど、そんなに離れている感じはしなかった。

これは……本当の恋？ 少なくとも私は本気、でも彼はどうか分からない。

彼はすりすりとおまんこを、パンストの上からまさぐりながら顔を見つめて来る。まるで私の反応を楽しんでいるかのように。

「えっち」

「そりやそうだ。こんな綺麗な女と二人きりになったらエロくもなるさ」

嘘でも嬉しかった。私に対しての気持ちがどうか関係なく、私に対して欲情している彼が愛おしい。

彼の手が私の両太ももの外側に周り、ゆっくりと上がってきて、パンストのゴムを掴んだ。脱がせ辛そうなので、私はスツとお尻を上げて脱がせやすくしてあげる。パンストがゆっくりと下ろされて、私は生足を彼にさらす。

ちゅぷ。

彼は、パンストを脱がせた私の太もものにキスをした。本当にイヤらしい。そして少しずつスカートの下に顔を潜り込ませてくる。

「んん」

ベッドに座ったまま、床に座った彼から太もものを舐められていた。少し冷えていた太ももの上を、暖かな彼の舌が這いまわる。

するっ。

唐突に彼の手が股間に潜り込んできて、私のパンティの上からおまんこをまさぐった。

「あっ」

「本当に敏感だな」

彼は、パンテイーの股間の布の脇から指を滑りこませて来る。

「あっ」